

1. 論文構成

本論文の構成は以下の通りである。

序章 問題提起

第一章 宮崎駿の作品とその受容

第一節 宮崎駿アニメの流行と代表作

第二節 特徴的な主題

第二章 『千と千尋の神隠し』の作品分析

第一節 欲望に取りつかれた現代の人々

第二節 関係性を見失った人間

第三節 神々を疲弊させる社会システム

第四節 成長物語だったのか？

第三章 『千と千尋の神隠し』の中国語版 の翻訳の問題

第一節 翻訳の難しさ

第二節 『千と千尋の神隠し』の中国版

第三節 翻訳に関する問題点

第四章 『千と千尋の神隠し』の受容の日 中比較

第一節 文化帝国主義とその批判

第二節 映画の紹介の仕方

第三節 作品解釈の比較

第四節 教材としての観点

第五節 受け手の感想の観点

終章 結論

2. 論文の概要

グローバル化の進行とともに文化帝国主義ということが語られるようになってきている。特定の文化圏に由来する文化的商品が世界的な規模で広がる結果、各地で文化の均質化が危惧されている。本論文の課題は、文化帝国主義について論じるための準備として、文化商品の流通が果たしてその受容の均質さまでも帰結するのかを考察することである。本論文では、世界各地で成功を収め、広く流通している宮崎駿の映画作品『千と千尋の神隠し』を事例として取り上げ、日中における受容のあり方を比較することで、上記の課題について検討することにする。

まず第一章では、『千と千尋の神隠し』を解釈するための文脈を明確にするために、宮崎駿の長編アニメを概観しながら、そこに見られる特徴的な主題を抽出した。具体的には、現代文明への批判(特に環境問題)、それを生み出した人間の欲望の問題、こういった問題を回避する糸口として現代人が見失っているものへの注目、その中にはほの見える共存のテーマ、さらに、課題に直面した人間の成長といった諸テーマが諸作品の中で繰り返し語られていた。これらの諸テーマが『千と千尋の神隠し』を理解するための文脈となる。

第二章では、日中における受容のあり方を考察するための準備として、『千と千尋の

神隠し』が提起している諸問題について考察した。まず、現代人の欲望の問題が取り扱われていた。現代人は欲望に取りつかれて自分を見失ってしまっている。お金を何よりも大事にしている。その結果、人々はあるべき関係性を見失ってしまう。人間同士の関係や自然との関係が損なわれてしまっている。このような現代社会で欲望に巻き込まれないようにすることは困難であるが、映画はそれとは異なる関係のあり方も示唆している。そこでは自分の努力はあまり役に立たない。むしろ、そこで大きな役割を果たしているのは、自分を支えているものへの記憶である。映画に登場する八百万の神々の世界は、世界を支えるものを象徴化することで、それらを忘れないようにしていると解釈することもできるのである。本章では、このように『千と千尋の神隠し』が全体として含んでいるメッセージを分析した。

第三章では、受け手の受容のあり方を規定する翻訳の問題について考察した。まず、翻訳が抱えている難しさについて一般的な立場から考察した。さらに、観客がこの映画を受容する際の背景となる、中国語版についての情報を整理した。その上で、また、『千と千尋の神隠し』の日本語版と中国語版のセリフを対比させ、翻訳する過程でどのような意味変容が生じているのかを考察した。具体的には、翻訳が含んでいる問題を、誤訳、適切な翻訳、ニュアンスが失われた翻訳、新しいニュアンスを含んだ翻訳という四つのタイプに分類しながら分析を行った。翻訳においては細かなニュアンスが失われ、平板化する傾向がある。そのことが人物理解を左右し、作品解釈に大きな

影響を及ぼすことになる。しかし同時に、翻訳を通して新しい解釈の仕方が生まれることもある。このように翻訳を介することで、観衆による理解や受容での違いが生まれてくることを明らかにした。

第四章では、以上の考察に基づいて、『千と千尋の神隠し』の受容の日中比較を行った。まず、映画の売り手である映画会社がこの映画をどのように紹介しているのかを分析した。これは観客の受容のあり方に影響することになるが、日中において大きな違いが見られた。次に、雑誌や論文などでこの映画がどのような観点から分析されているのかを考察し、中国においては経済や映画業界におけるモデルとしてこの映画を解釈するなど、日本とは異なった観点があることが分かった。さらに、教材としての使用の仕方も日中では異なっていることを明らかにした。最後に、観客自身がこの映画についてどのような感想をもっているのかを分析した。その結果、映画を見る観点や映画を批評する観点が日中で異なることが分かった。

これら四章の分析を通して、宮崎アニメが、世界中で成功しているにしても、だからといって、それが全く同じように受容されているわけではないことを明らかにした。文化商品の世界的流行が必ずしも文化帝国主義を意味するとは限らないのである。

主任指導教員 森 秀樹
指導教員 森 秀樹